



学童野球に新たな選択肢を

ジュニア・エンジョイ・ベースボール・コミュニティ (JEBC)

中桐 悟 氏 島本 隆史 氏 齊藤 宗章 氏

2024年12月10日(火) 座談会開催

第3回のセミナーから約4ヵ月後の2024年4月1日、中桐氏は小中学生の野球チームが集う組織「ジュニア・エンジョイ・ベースボール・コミュニティ」(JEBC)を立ち上げた。JEBCには、北海道から沖縄までの30チーム(2025年1月時点)が参加し、「第二の選択肢」として、現在の社会環境やニーズに適応した先進的な野球の場を増やす取り組みを推進している。また、セミナーで紹介されたPCGリーグを引き継ぎ、「INTINITY BASEBALL LEAGUE U-12」(インフィニティ・ベースボールリーグ U-12)という新リーグを始動している。

今回は、中桐氏を含む実行委員メンバー3名に、JEBC結成の経緯や今後の展望に加え、学童野球の課題や保護者の理想的な関わり方について、幅広く語っていただいた。

1. 自己紹介・チーム紹介

中桐 練馬アークス Jr.ベースボールクラブ(以下、練馬アークス)の中桐です。私自身は野球経験がほとんどありませんが、「外部のリソースを活用し、保護者の負担を減らしながら、みんなに楽しく野球をしてもらおう」というコンセプトでチームを運営しています。

島本 練馬アークスは子どもたちが程よく熱量をもちつつ楽しんでいる、そのバランスが最高。

齊藤 クラス分けされて、トップクラスの子たちはより上を目指していますよね。練馬アークスの子はみんなうまいです。サードの子がバックハンドで捕ったり、走りながら片手で捕ってファーストに投げたりしていました。

中桐 正面に入れる打球は正面に入るように伝えていますが、バックハンドにトライしたことを否定はしません。みんな勝手にうまくなっています。



練馬アークス Jr.ベースボールクラブ代表
中桐 悟 氏

島本 さいたまインディペンデント(以下、インディペンデント)の島本です。私はずっとサッカーをしてきましたが、仕事で野球メディアに携わった縁で、子どもの野球に関わるようになりました。自分の子どもが小学生になり、野球をやらせたいと思って、2022年に「元気・感動・繋がり」をコンセプトにしたチームを立ち上げました。

齊藤 インディペンデントは野球だけでなく、

ラグビーやサッカーなどいろいろなスポーツをやっているのがすごい。野球でもコーチが下投げでボールを投げて、子どもたちが思い切り飛ばして、本当に楽しそうです。

島本 野球をやるハードルを低くしたいと強く思うので。小学生のうちは楽しくプレーし、中学生になっても「野球をやりたい」という気持ちを持ってもらえたらと思います。

中桐 あとは指導者の質がすごい。全国の学童チームと比べても比類ないレベルです。



さいたまインディペンデント代表
島本 隆史 氏

齊藤 ポジティブベースボールクラブ(以下、ポジティブ)の齊藤です。私は小学3年生から野球を続けてきました。2022年に今のチームを立ち上げ、今年で3年目です。「子どもたちと仲良く楽しく野球をする」というコンセプトで運営しています。

中桐 齊藤さんのチームは、とにかく雰囲気が良いですね。保護者も含めての、ファミリー感。あの一体感はどうやって醸成したのですか。

齊藤 うちは野球の練習だけでなく、都市対抗を観戦したり、遊園地やアスレチックに遊びに行ったりします。そういう時に保護者も来てくれるので、自然と仲良くなります。チームとしては送迎だけで十分なのですが、保護者も一緒に活動に参加してくれることが多いです。

島本 あのわちゃわちゃ感、好きですね。元気がない時がないです(笑)



ポジティブベースボールクラブ代表
齊藤 宗章 氏

2. JEBBC の結成

中桐 野球をする子どもの減少に強い危機感を持っていて、このままでは野球界全体が縮小すると感じました。でも島本さん・齊藤さんをはじめ、私のチームと同じような考え方で運営をしている方が全国にいます。そこで「お互いを刺激し合い、高め合い、しっかりと発信もしていこう」というコンセプトで、コミュニティの立ち上げを考えました。

島本 立ち上げに際して、中桐さんが私たちに声をかけてくれました。私自身も野球メディアの仕事をしてきた中で、情報が共有されていないことで損をしているチームや人をたくさんみてきたので、横のつながりを作りたいと感じていました。

齊藤 私はPGCリーグでお二人と交流があり、話をもらいました。「何か後ろ盾がほしい」というのも、きっかけになった思いのひとつでしたよね。

中桐 国内の学童野球チームの多くはいわゆる「連盟」(全日本軟式野球連盟)かスポーツ少年団に属しています。どちらも歴史ある組織で素晴らしい面もたくさんあり、否定するつもりはありません。ただ、必ずしも今の社会の流れにフィットしていない部分もあります。

学童野球の大きな課題のひとつは、指導者の質の問題です。もちろんすべてのチームにあてはまるわけではないですが、まっとうな指導者から論理的に野球を教えてもらえない環境があるのが課題だと思います。練馬アークスではコーチには謝礼を払って教えてもらう体制をつくっています。

島本 練習時間の長さも課題だと思います。私自身も親なので、土日に子どもにスポーツをさせたいと思う一方で、家族の時間も優先したいというバランスの問題を感じています。

齊藤 うちも共働きだけど、やはり土日がすべて野球だと家族でどこにも行けないし。休みなしだよ。練馬アークスの練習時間はどのくらいですか。

中桐 最長で4時間です。

島本 うちも3時間、長くて4時間ですね。

齊藤 うちも4時間です。あと、学童野球ではどうしてもトーナメント戦で勝つために、うまい子ばかりが試合に出る。その子が肘を壊すこともある。

中桐 少子化で1チームあたりの人数が減っているの、余計にそういう問題がありますね。

島本 2~3年生が6年生の試合に出るとか、体力的にはきついですよね。子どもの環境は関わる大人が守っていかないといけないと思います。

中桐 同じような課題意識をもち、連盟に属さずに運営するチームは全国で増えています。そのような「新しい選択肢」を広げることで、学童野球の縮小を少しでも食い止めることができるのではないかと考えています。

島本 まさに「選択肢」のひとつです。旧来型のチームに入るのも良いですが、そのほかの受け皿が少ない現状を変えることが、子どもたちの将来につながると思います。

齊藤 野球は連盟やチームによって、ルールやボールが異なる。そうしたカテゴリーを超えたコミュニティがあればいいよね。

島本 特に少年野球は、つながっているようでつながっていない。国内のプロ野球が盛り上がっているのに、なぜ学童野球の組織はそれぞれが独立して連携していないのか疑問に感じています。

齊藤 学童野球は野球人口の入り口ですからね。選択肢を増やして、野球を始めやすい環境を作ってあげられたらいいですね。

中桐 これからチームを立ち上げる人や、野球を始める子どものハードルを低くしたいと思います。チームを立ち上げるのは大変なことだと思われていますが、ホームページとユニフォームを作ったら一丁上がり(笑)

齊藤 本当にそう。それで、JEBCに加入してもらいたい。

3. JEBC のこれまでの活動

中桐 2024年4月には、JEBCに所属するチームで集まって、野球教室を開催しました。島本さんのご紹介で、社会人野球やプロ野球で実績のあるコーチに来ていただきました。初回は東京でやりましたが、今後は全国に広めていきたいです。

島本 8月には勉強会も開催しました。大手教育会社に勤務する東大野球部出身の方を呼んで、勉強の習慣づくりについて語ってもらいました。私たちはスポーツと勉強の両立も大事にしています。オンラインですが、熱心なチームからは4~5人の親御さんが参加してくれました。

齊藤 JEBCの全体ミーティングもオンラインでやりましたね。各地域やチームの課題を話してもらったり、ご質問をいただいたり。

中桐 地域によって違う悩みもあれば、同様の悩みもありました。共有して皆で解決策を語られて、すごく有意義だった。ほかには、チームの立ち上げ支援や既存チームの変革支援も行っています。支援したチームには、JIBCにご加入いただいています。

島本 最近では、これまでつながりのなかったチームからも連絡がありますね。少しずつ認知が広がってきたのかな。

中桐 全国に学童野球チームは1万以上あるといわれているので、まだまだです(笑)

「INFINITY BASEBALL LEAGUE U-12」についてですが、2020年に神奈川を起点に始まった学童野球の私設リーグ「PCG」(プレーヤーズ・センタード・ゲームズ)が前身です。このリーグは非常に先進的で、勝敗だけではなくポイント制を導入しています。たとえば「全員が出場したら1ポイント」「ピッチャーを2人以上交代で1ポイント」など、子どもたちを真ん中に、勝敗よりも子どもたちの成長をいかに促すかを主眼に置いています。練馬アークスも加盟して、試合をしてきました。今回PCGからご相談をいただいて、2025年度からは当方で引き継ぎ、コンセプトはそのままにリーグ名称を「INFINITY BASEBALL LEAGUE U-12」に変更してリニューアルする予定です。12月1日から加盟チームを募集し、すでに首都圏だけでなく静岡、栃木、兵庫にも広がっています。これを全国に広げていきたいです。

島本 基本的なルールは決まっているけれど、細かい事情を考慮してチーム同士でルールを相談できるのも良いですね。

齊藤 「野球を始めたばかりの子の場合は下投げでもいい」とかね。本当にやりやすかった。皆一緒に出場できるからいいよね。保護

者もベンチにいる子どもより、試合に出ている姿を見たいですね。

中桐 試合を通じた成長はものすごく大きい。トーナメント戦だと負けられない戦いが続くので、監督は勝てるメンバーを選びます。PCGはリーグ戦で、基本的には「全員出場しよう」というレギュレーションなので、チームとしての成果より、子どもたちの成長を優先できる点が良いと思います。あとは、新リーグでは試合のマッチングの仕組みを変えました。オンラインのプラットフォームを入れたので、マッチングにかかる運営の負荷がだいぶ軽減されると思います。リーグ戦ですが総当たりではないので、好きなタイミングで好きなチームと試合が組めてフレキシブルです。

島本 運営の負荷は本当に大きかった。表には見えない部分で大変なことが多いので、システムで解決できるのは良いですね。

4. JIBCが考える保護者の役割

齋藤 ポジティブベースボールクラブでは、保護者の当番制はなし、父母会の設立は禁止しています。これも、学童野球を始める上で大事な選択肢のひとつだと考えます。保護者の手伝いがどうしても必要になる場面も多々ありますが、できるだけ私たち運営陣・指導陣でサポートをしています。

島本 私たちも父母会等はありません。任意で一緒に入って練習に参加してくれる保護者が何名かいます。保護者が自分の子を褒めるのは普通だと思いますが、うちのチームではほかの子どもにも積極的に声掛けしてくれます。その雰囲気づくりは、すごく助かっています。大人が一緒に入って練習することで子どもの見本にもなり、安心感にもつながりますし、何よりも明るくなって場が盛り上がるのが

いいですね。

齋藤 私たちも、お手伝いを申し出てくれる方にはやってもらいます。ほかのクラブに比べて、うちの保護者は見守っている人数が多いのではないかと思います。練馬アークスはどうか。

中桐 普段は、数名の保護者に練習と一緒に参加していただき、ご見学の保護者もちらほらいらっしゃいます。手伝いではなく「一緒に参加する」という定義にしています。教えるのはあくまでコーチで、教え方がぶれないように、そこだけは気を使っています。

齋藤 うちが保護者から「コーチをやりたい」と言われれば、資格の勉強をしてもらった上で、野球経験に関わらず担当してもらっています。練馬アークスは、保護者のコーチは一切いないのですか。

中桐 私たちの場合は「保護者負担ゼロ」とはっきり標榜しているので、明確に線を引いています。保護者の中には、びっくりするような野球の経歴をお持ちの方もいらっしゃいますが、スタッフと保護者は明確に分けて考えています。JIBCとしては、保護者の関わり方については、各チームのスタンスを尊重していきたい、正解はないと思います。

島本 ただ、当番制などで親御さんの負担が増えるのはどうか。

齋藤 そうですね。負担が大きすぎるとは良くありません。JIBCとして、保護者向けの勉強会やコンテンツの配信もできたらいいですね。

島本 保護者のチームへの関わり方も学童野球の重要な課題のひとつですよね。どのように関わっていくのが正解なのか、運営者は迷うところではないでしょうか。

中桐 子どもと保護者の適切な関わり方や距離感については、言語化するのが極めて難

しいです。ただ、適切な距離感で関わる家庭のお子さんは、野球がうまくなるスピードが速い。言い過ぎるでもなく、無関心でもないというか。たとえば子どもが「キャッチボールしよう」と誘ったら、おそらくたくさん相手をしています。でも細かな指導まではしていないと思います。親から頭ごなしに「こうしろ」「ああしろ」と指導するのではなく、子どもが自発的にいろいろ考えてうまくなって、チームの練習で確認して、また家で親と一緒に考える、そういう関わりが理想的ではないかと思います。

齋藤 子ども自身がうまくなりたいと思って、「お父さん、練習手伝って」と自ら発信できるような家庭環境も大事です。

島本 そういう家庭の子は勝手に練習をしてうまくなりますよね。そうした環境をどう作っていくか、仕事と家庭のバランスをとりながら子どもに向き合っていくのはけっこう難しいですね。

齋藤 難しい。仕事から疲れて帰ってきて、ゆっくりしてビールを飲みたい時なら、「あとにして」と言いがちですよ(笑)

中桐 しかも、自分が指摘したいことはちょっと我慢する。結論は、何も言わないことです。しっかり見守って、その時々で適切な情報や道具などを提供してあげる。

齋藤 一番難しいな。

中桐 難しいですね。一見遠回りにみえますからね。

5. JIBC の今後

中桐 先進的なチームが全国に広がりつつあるので、協働して活動の輪を広げ、微力ながら学童野球を少しでも持続可能なものにできるように尽力したいです。そのために、ほかの団体がやっていないような新しい施策を打

ち出して、いろいろな取り組みができればいいなと思います。

齋藤 まずは JEBC 加盟チームで選抜チームを結成し、オープン大会に出場してみようと考えています。子どもたちには選抜チームで新たなスキルや可能性を発見してもらい、チームに還元してほしいです。今、エントリーを募集中です。ゆくゆくは埼玉選抜、東京選抜、神奈川選抜などがどこかのグラウンドで一堂に会して大会をするのも面白いと思います。

島本 自分のチームだけだとどうしても視野が狭くなる。ほかのチームのうまい子や特徴ある子とコミュニケーションを取り、交流が増えていくと面白いですね。あとは、チーム同士で集まってキャンプをしたり、ワンデイ大会のような JEBC カップもぜひ開催してみたい。子どもたちが寝食を共にして、野球以外で交流する機会も積極的に設けたい。スポーツを通していろんな経験をして、中学、高校、その後の野球人生の礎にしてもらいたいと思います。

中桐 トーナメント戦では、全国大会まで進まなければ全国のチームと交流するのは難しいと思います。リーグ戦で来られるチームを招待すれば、勝ち上がらなくても全国のチームと交流できます。

齋藤 学童野球はどうしても勝ちを求め、大人のエゴで子どもたちを使ってしまうイメージが今も少しあると思います。もっと子どもたちのために、野球を始めやすくする取り組みのひとつとして、JEBC があると思います。

中桐 少子化が相当のペースで進んでいます。今の小学 6 年生の人口は約 100 万人ですが、昨年(2023 年)生まれた子どもは約 70 万人で、この十数年で 30 万人以上も減ってい

ます。その中で、野球人口はそれ以上の割合で減少しているわけですから、野球界が現状から変わらなければ、早晩野球をやる子どもがいなくなる危機感があります。私たちは野球が楽しいスポーツだと思っていますし、子どもの成長にとっても絶対に有意義だと信じています。同じように考えている人が全国にたくさんいることは確実なので、憂いているだけでなく行動を、「その一歩を一緒にやりませんか」と伝えたいです。

島本 「やる人がいないのであれば、僕らでやろう」ですよね。幼少期、幼稚園ぐらいからボールに触れる機会を作ることで、野球に興味を持つ子が増えると思います。また、大人が教えすぎてしまって野球が嫌いになる子どもも多いと思うので、指導の仕方を変えていきたいです。

齋藤 そうですね。JEBC や新リーグでまずは楽しく野球を始められる環境を作り、「クラブやチームは子どもたちのためにある」というメッセージをどんどん発信して、ひとりでも多く野球を始める子が増える—そういう活動になればいいと思います。

